日本国際理解教育学会会報

JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

Vol. 39　2011（平成23年度）No. 1　平成23年11月30日　編集発行：日本国際理解教育学会事務局

〒187-0021　東京都小平市上水南町3-2-1文化学園大学小平キャンパス栗山研究室内　TEL：042-327-8873　FAX：042-327-8874
E-mail：kokusairikai@bunka.ac.jp　Website：http://www.kokusai.com

目　次

初代学会会長　天城　勲先生のご逝去を悼む …… 1
学会長挨拶 …… 2
第21回研究大会大会実行委員長報告 …… 3
第21回研究大会シンポジウム報告 …… 4
第21回研究大会「特定課題研究」報告 …… 5
第21回研究大会参加記 …… 6
全国各地の研究会からの報告 …… 7
日中韓協働教材開発プロジェクト報告 …… 8
博学連携教員研修ワークショップ2011 in みんぱく …… 9
国際理解教育研究会「文化的多様性と国際理解教育」研究会報告 …… 10
2011（平成23）年度総会報告 …… 11
理事会（各委員会等）報告 …… 14
お知らせ（これからの行事・イベント案内） …… 15
事務局通信 …… 16

巻　頭　の　言　葉

初代学会会長　天城　勲先生のご逝去を悼む

元（二代）日本国際理解教育学会会長
元帝塚山学院大学国際理解研究所所長　米田　伸次

日本国際理解教育学会の初代会長を10年間務めていただいた天城　勲先生が，今年７月22日に逝去された。学会会員諸氏と共に，謹んで故先生のご冥福をお祈り申し上げたい。

私が先生と初めて出会ったのは，1975年，日米合同研究事業（カルコン）の一環としての日米合同国際理解教育専門家会議に，私が日本のユネスコ協同学校（ASP）の代表として参加したときである。先生は文部省顧問としてこの会議の議長をされていたが，私は会議の度に，他国理解を米国に特化する会議の主旨を批判，アジア理解の重要性を訴えた。結局，私はこの会議の委員を途中で辞してしまったが，当時，ユネスコのアジア無償義務教育計画（カラチプラン）の日本代表でもあった先生は，私の批判を寛容と柔軟な姿勢で受け止めて下さった。文部省にもこんな方がいるのかと驚いたことを記憶している。こうした先生との出会いが契機となって，私がかかわっていた国際理解教育研究所（後，帝塚山学院大学国際理解研究所）の紀要『国際理解』第７号（1975年）に，「世界的にみた国際理解教育の新展開」をご寄稿いただいた。この論考は，唯一日本代表として会議に参加されたユネスコの1974年「国際教育（略称）勧告」の日本初の解説，評価ではなかったかと思う。先生はこの論考の中で，「この勧告は，日本の国際理解教育の大転換の契機となる」と記されている。これより18年後，学会設立の基本理念にすえられたのはまさにこの「勧告」であった。その後，先生には研究所の顧問をお願いし，「国際理解」が休刊となる37号（2006年）まで，先生にご助言をいただいてきた。戦後の日本の教育行政をリードされてきた先生の業績は数えきれないが，いま，日本の国際理解教育に限って，先生の業績の一端を改めて会員諸氏と共有しておきたい。まず，その一は，ユネスコ「国際教育勧告」の作成にかかわられたことである。この「勧告」は，今日もなお世界の「国際教育」の歴史的文書としてその意義を失っていない。その二は，1991年，先生を中心として日本国際理解教育学会が設立され，初代会長として今日の学会の基盤を築いていただいたことである。その三は，ユネスコが1996年に発表した21世紀の教育の四つの視点を示した「21世紀教育国際委員会」報告書の作成会議に，唯一日本の代表として参加されたことである。この「報告書」の先生監修の翻訳・解説（『学習：秘められた宝』）の中で，先生は，「学びの目的は『人間として生きることを学ぶ』ことにある。自己を知ることから始まって，他者を知り，他者との関係を築くということは『共に生きることを学ぶ』基本であり，それはまた国際理解教育の基本でもある」と述べておられる。この「報告書」は，現在もＥＳＤの学習の基本として重要な位置づけを与えられている。昨年暮に先生のご入院を知り，今春にもお見舞いをと思いつつ，事情で果たせなかったことが悔やまれる。

学　会　長　挨　拶

ウガンダにて

日本国際理解学会長　大津　和子

9月に学生たちとウガンダにでかけてきました。ウガンダを初めて訪れたのは1995年でした。当時，ムセベニ大統領が，「エイズ問題は国家の一大危機である」との宣言を発し，多くのドナーの支持を得て，エイズの感染防止対策に国を挙げて取り組んでいました。そうしたなかで，エイズ教育がどのように行なわれているのかを調査したのです。

そして，2002年にはウガンダのフォーマルな基礎教育に，2003年にはノンフォーマルな基礎教育学校（コミュニティスクール）に焦点をあて，いくつもの学校を訪問して授業観察，生徒・教師・保護者・教育行政官へのインタビューなどを行いました。今回は8年ぶりにウガンダを訪れ，首都カンパラの自動車（日本中古車が多い）と高層ビルと携帯電話の多さに驚きました。

カンパラ市内の平均的な公立小学校（7年制）は1クラス60人から70人で，教科書を持っている生徒は10人程度です。ウガンダ政府の統計によると，純就学率は1990年の67％から2010年には98％に上昇しました。が，小学校7年生を終了する生徒は32％，小学校を修了して中学校（4年制）に進学するのは74％です。したがって，中学校に進学するのは，同年齢の4人に1人ということになります。

カンパラ市内のあるキリスト教系私立中等学校では，高校への進学率を高めるために，1クラス約20人の授業を行っていました。生徒の大半は遠方に居住しているため，同じ敷地内にある寮で生活しています。寮生は，7時20分から8時までチャペルでお祈りをし，8時から夕方5時までの正規授業に加えて，夜の7時から9時15分までの勉強も含め，ハードな日々を過ごしています。

他方，村の小さな小学校に通う子どもたちは，インタビューによると，朝5時半に起きて1－2km離れた井戸に行ってポリタンクに水を汲んで，それを頭に乗せて家まで運び，学校から帰るとまた水運びや食器洗い，掃除など，毎日2－3時間，男の子も女の子も家事を手伝っています。この学校にはエイズ孤児（片親または両親を失った子ども）が58人中37人いました。ウガンダにおけるエイズ感染率は，1995年の17％から，2010年には6％に低下しましたが，エイズ感染者が減少したわけではなく，エイズ孤児もなお増加していて，大きな社会問題になっています。

どの学校でも，私たちが訪問すると，いつも子どもたちが歌やダンスで大歓迎してくれ，学生と一緒に遊ぶうちに笑顔が弾けます。出会う人々がとても温かく，特に今回は，「3月11日の津波と原発事故は大変でしたね。その後日本はどんなふうになっているのですか」などと尋ねられ，複雑な思いでした。

世界をあげて実現をめざしているミレニアム開発目標（極度の貧困と飢餓の削減　普遍的な初等教育の達成など）は，サブサハラ諸国に大きくかかわっています。サブサハラ諸国については，日本ではまだ情報が十分ではなく遠い存在ですけれども，今後は国際理解教育においてもっと扱われるようになることを願っています。

第21回研究大会大会実行委員長報告

第21回研究大会実行委員長　井ノ口貴史

京都橘大学を会場に日本国際理解教育学会第21回研究大会が６月18日（土），19日（日）の二日間にわたって開催されました。自由研究発表では，２日間に渡って14分科会，68本の研究発表が行われました。韓国からは，19名の参加申し込みがあり，９本の研究発表が行われました。大会両日を通して，会員・非会員を含め約250名（本学学生を含む）の参加者を得て，無事終わることができました。

日本国際理解教育学会は，昨年20周年記念大会を終え，21年目のスタートを切りました。第21回研究大会を本学会の新たな発展の第一歩とするためにどのようなコンセプトの大会にすべきかという点がもっとも大きな課題でありました。昨年の第20回大会での記念講演で佐藤学先生は，国際理解教育も再定義してグローバル教育へ展開すべきだとして，その問題領域を次の四つだと提起しました。①市民性の教育（地球市民，日本社会の市民，地域共同体の市民の三次元の市民性），②多文化教育，③ESD教育，④平和教育がそれです。第21回研究大会の特定課題研究は，「持続可能な社会形成と教育：ESDの実践基盤に関する総合的研究」と決まっておりましたので，シンポジウムのテーマを他の問題領域に絞って企画することにし，学会の20年の歩みを振り返ってみることにしました。

日本国際理解教育学会の設立総会は1991年１月26日に開かれています。ちょうど湾岸戦争が始まって10日ほどという時期です。今から思えば，冷戦構造が崩壊し，世界に平和が訪れるとかもしれないという期待は，湾岸危機・湾岸戦争で打ち砕かれ，その後の民族対立，民族紛争，環境問題などが国際社会の大きな問題としてクローズアップされていく起点となる年でした。

「人々の心に平和の砦を築くという精神の下に，ユネスコが永年唱えてきた平和と異文化理解を軸とする国際教育の必要性が今日ほど高まったときはない。国際教育は知識，技術，思考力，価値観，態度形成にわたる教育実践である。」

設立総会で配布された設立の趣旨に書かれた一節です。本学会の原点である「平和教育」と「教育実践」をキーワードに設定したテーマが，今回の「『9.11』後の平和教育の成果と課題―グローバル化の下で，戦争をどう伝え，どう教え，どう学ぶか―」でした。2011年は，湾岸戦争から20年，「９.11」から10年目に当たっていましたので，この間の平和教育の成果と課題を考えてみることには一定意義があるのではないかと考えたのです。ところが，東日本大震災が起こり，ここに新たな「3.11」から平和の問題を考えるという視点が加わりました。現場主義を重視するジャーナリスト，現場教師，研究者によるシンポジウムは，参加した多くの方々から好意的な評価をいただきました。

2日目の特定課題研究も学校現場からの実践的な研究と理論がかみ合ったものとなりました。事前申し込みの段階で，非会員の学校現場の先生方，大学院で研究を続けている学生の皆さんから多くの問い合わせがあり，当日は非会員の方も多く参加されました。「学校現場で研究課題となっているESDについて何か指針が得られるのではないかと参加しました」「ESDの視点からの教育実践を具体的に知りたい」との声を何人かの先生方から聞きました。本学会の活動が，学校現場の実践と研究に一定の役割を果たし得るのだとの確信を得ることができました。

本大学では５年前に児童教育学科ができました。昨年度，初めて児童教育学科の卒業生を送りだし，多くの学生が小学校や幼稚園，保育園で教育の仕事に携わることになりました。今回の研究大会の学生スタッフの多くが小学校の教師を目指す学生たちでした。彼らは，初めて大学院生，現職教員，NPO関係者，大学の研究者の自由研究発表に触れ，研究をどのように進めるのか，どのような研究課題があるのかなど身近に感ずる機会を得ることができました。シンポジウムや特定課題研究で現職教員が教室で学びを深める子どもたちを育てる姿勢を間近にみて，感動していたのが印象的でした。今回の研究大会開催に当たり，実行委員会が「教育実践」と「理論」をつなげることを重視して企画したことが，本学学生に大きな成果を残すことができ，教育実践力を育てることを大きな目標にして教育を行っていることに寄与できたのではないかと思います。

最後に，大会案内などに詳しい説明もないまま振り込み用紙を二度入れたために，結果として二重払い引き起こすような不手際がありました。ご迷惑をかけた方々にお詫びいたします。また，韓国の自由研究発表を申し込まれた方からは，大会当日までプログラムが届かず，自分の発表順がわからなくて困るとの意見も聞きました。韓国側研究者の方へ早めにプログラムを添付ファイル等で送るべきでした。その他，第21回研究大会の準備や実施に当たって，至らなかった点も多々あったと思います。ご不快の念やご迷惑をおかけした会員の方々には，この誌上を拝借して心からのお詫びを申し上げます。

第21回研究大会シンポジウム報告

京都橘大学　井ノ口貴史

今大会では，シンポジウム「9.11以降の平和教育の成果と課題―グローバル化の下で，戦争をどう伝え，どう教え，どう学んだか」を行いました。2011年は「9.11」から10年目に当たります。過去，第14回研究大会(京都ノートルダム女子大学)のミニシンポジウムで，「9.11以降の国際理解教育を考える」というテーマで取り上げられていますが，今回は，井ノ口がコーディネーターを務め，「9.11」以降のイラクやアフガニスタンの取材活動をもとに，メディアへの出演や学校現場での講演を通じて市民や子どもたちに戦争の実相を伝えている立場からフリージャーナリストの西谷文和氏を迎え，学校現場で戦争と平和について授業実践を積み上げてきた西村美智子会員（啓明学園初等学校）と北尾悟会員（奈良女子大附属中等教育学校），研究者の立場から藤原孝章会員（同志社女子大学）とともに，この10年間，学校現場ではどのような実践が積み上げられてきて，どのような成果や課題が見えてきているのかを考えました。各パネリストの発表題目は以下の通りです。

西谷文和「戦争と原発　その根源にあるもの」

西村美智子「「戦争を学ぶ」学習から「平和をつくる」学習へ～ヒロシマ・ロスアラモスから"平和のためのプロジェクト"づくりへ～」

北尾悟「過去との対話・現在との対話－人間と向かい合い，戦争と平和を学ぶ－」

藤原孝章「〈9.11と3.11〉戦争と災害の伝え方・学び方－時事問題学習の課題－」

西村会員は，「9.11」，ボスニア・コソボ，ヒロシマなどの一連の学びを積み上げてきた子どもたちの学びを総括して，「戦争を学ぶ」から「平和をつくる」学習への転換を提起しました。具体的には，つながり会って生きることを実感させる学び，自分たちの身近な問題に目を向けて主体的に平和をつくる活動です。そして，6年生がグループで取り組んだ「平和プロジェクト」で主張された子どもたちが語る未来の希望を紹介しました。

北尾会員は，現在，戦場体験世代（85歳以上）が激減している事実を指摘し，この世代の語りを聞くとともに，これらの兵士が戦後をどのように生きてきたかを聞き取ることが重要だと指摘し，元兵士の本多立太郎さん（昨年没）と生徒たちとの交流を通して，戦争と平和の問題に主体的に取り組む生徒たちの学びの深まりを紹介ました。

西谷氏と藤原会員の提起は，「3.11」を意識したものでした。西谷氏は，直前に取材に訪れていたバーレーンとリビア情勢を映像で紹介し，アメリカの中東政策におけるダブルスタンダードを問題だとしつつ，「戦争と原発　その根源にあるもの」は同じで，それは利権だとして，真実が報道されず，犠牲になるのは「地元の弱い立場の人々だ」と指摘しました。このような国際政治の現実をリアルに学ぶ必要があると強調しました。

藤原会員は，本シンポジウムの意味を，①「9.11」後10年の節目に当たる現在，「新しい戦争」といわれた意味を問う必要がある，②この10年間に進んだ情報のグローバル化を踏まえた議論をすることと捉え，「9.11と3.11を結びつける学びの視座はあるだろうか」「そうであるならば，どのような学習の契機が可能か」との問を設定します。そして，「9.11と3.11」を時事問題学習としてとらえることであり，平和な社会，安心・安全な社会とは何かを学習として探ることである，と提起しました。

フロアーから質疑では，「現代のマスコミの実態と今後の変化」，「小学生が平和のプロジェクトで提案した平和を作るための方策」，「日常生活の中で暴力以外の方法で問題を解決する体験を持つ重要性」，「3.11以降の社会の変化をみる視点」など多様な視点で論議され，盛況のうちに終了することができました。

第21回研究大会「特定課題研究」報告

「持続可能な社会形成と教育：ESDの実践基盤に関する総合的研究」の成果を共有

聖心女子大学　永田　佳之

「国連持続可能な開発のための教育（ESD）10年」がはじまり，７年目を迎えた。国連による事業として位置づけられている「10年」を締めくくる最終年会合は2014年に日本で行われることが決議されており，その会合で成果を共有すべく，国内外でさまざまな実践や研究が展開されている。こうしたグローバルな動向に呼応する形で本学会でもESDをテーマにした特定課題研究に着手して２年目となった。「10年」の開始当初より国連機関や市民団体，大学など，多様な組織がESDに取り組む中で，学会ならではの役割とは何かという，いわば学会の社会的ミッションを意識しながら研究活動を推進してきた。道半ばの成果ではあるが，第21回研究大会当日の報告概要を以下にまとめさせていただく。

学会の社会的ミッションを意識した試み

研究会では一連の議論が重ねられ，ユネスコが標榜するような持続可能な社会構築を「SD（持続可能な発展（サステナブル・ディベロップメント））山」への登山として喩えるに至った。持続可能な未来の構築という最終目標である「頂上」への眼差しを共有する一方で，そこに至るまでは多様なルートがあり，上記の組織はそれぞれのルートを開拓しつつ，頂きに近づく努力を払っているという現況を，報告のはじめに図示した。さらに「SD山」の８合目には「環境的・社会的公正」という理念が，６合目には「ライフスタイル・行動・価値観の変容」という目標が意識されてきたという見方も示した。しかし「10年」をふり返り，ESDが社会的にも学校現場にもなかなか浸透しない背景には，２～４合目あたりの「裾野」近くのルート開拓が疎かになっているのではないかという見解を研究会では共有し，学校等の実践現場と６合目以後を結びつけるための手法（アプローチ）を整理して示すことが学会としてのミッションであると捉えた。実践レベルでは「何でもあり」との批判もあるESDの問題性を解決できる糸口を，理論と実践を架橋するアプローチを複数示すによって見出せるのではないかと考えた上での試みである。

ESDを実現する四つのアプローチと多様な実践例

研究会では，１）学び（授業実践），２）カリキュラム，３）学校運営，４）地域課題，という四つの切り口を設定し，それぞれについてESDらしい実践を具現化するためのアプローチ，すなわち「学び」については価値変容型アプローチを，「カリキュラム」についてはインフュージョン（染み込ませ型）アプローチを，「学校運営」についてはホールスクール・アプローチを，「地域課題」については地域課題探求型アプローチを提示し，現場でESDを実践する際の参考にしてもらうことを射程に置いた。報告では，上記の１)～４）のアプローチに取組んでいる実践・研究者である本学会会員に登壇を依頼し，それぞれの在り方について具体的に説明していただいた。

原郁雄会員（長野県駒ヶ根市立赤穂東小学校）は，子ども達がストリートチルドレンという世界の「現実」と向き合うことを通して自身の考え方や価値観が変容し，さらに新たな価値観を再構築していくプロセスを，子ども達の実際の声も交えて，価値変容型アプローチとして共有した。

竹村景生会員（奈良教育大学附属中学校）は，中学校でESDを実践するにあたり重要なことは，ESDへの転換ではなく，従来の実践の延長上に位置づけたESDへの展開であることを強調した上で，持続可能性のイシューを全ての教科に取り込むことにより，カリキュラムの中にいかにESDという要素を織り込んできたのか，すなわちインフュージョン・アプローチの実践について紹介した。

高橋和也会員（自由学園）と小林亮会員（玉川大学）は学校全体でESDに取組むホールスクール・アプローチの事例として自由学園を取り上げ，同学園が長年標榜してきた「生活即教育」をホールスクール・アプローチとして再解釈することが可能であるとし，学園の教育全体がいかにホリスティックな共同体を目指してきたのかを独自の「食育」の事例を中心に示した。

大島弘和会員（大阪府立北淀高等学校）および伊井直比呂会員（大阪府立大学）は，小学校から大学まで18校が参加する大阪ユネスコスクール群による実践を例に，地域の課題を解決する上で持続可能な世界を担う児童・生徒による世代内･世代間の学びあいが重要であることが報告された。また自尊感情の欠如に見られる生徒のしんどさを「つながり」を重視したESD実践で自己受容と転換させてきたことについても紹介された。

基底にあるホリスティック・アプローチ

パネルでは，上の報告に対するコメンテータとして文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室長であり，日本ユネスコ国内委員会事務次長でもある浅井孝司会員が政策や行政施策の観点からESDにとって重要な力として未来像を描く力や多面的なものの見方などがあげられるとし，各々の実践に対してさらなる意義づけを行った。

最後に，フロアから評価や入試との関連等についての質問があり，パネリストからの回答があった。そこでの応答を踏まえ，研究会の世話人である永田から，上記の四つのアプローチの基底にはホリスティック・アプローチとも呼べるシステム論的なものの見方・考え方が見出され，それは3.11後の社会情況において一層の重要性を帯びつつあることが強調された。

第 21 回 研 究 大 会 参 加 記

埼玉大学　磯田　三津子

今年度の研究大会シンポジウムは、平和教育がテーマであった。今日の学校教育において、平和をどのようにとらえ、授業を実践することができるのかについて、私自身、関心があり、シンポジウムに参加した。

シンポジウムでは、ジャーナリスト、小学校、中等学校、大学の教員それぞれの立場から、戦争と平和、そし平和教育について語られた。その中に、日本軍元兵士や海外支援活動を行っている人物との対話を中心とした実践の報告があった。その実践で生徒は、戦争や平和活動に直接かかわった人と対話をする。この実践の中で、教師は平和や戦争について教えることはしていない。しかし、生徒は、対話を通して、平和の意味について考え自分なりの意見をもつことができているようであった。この実践をはじめ、シンポジウムでは、平和教育をどのように実践すれば良いのか具体的な視点がいくつか提示された。こうした視点を踏まえながら、平和教育を考えることは、これからの私たちの課題である。

一方、二日間にわたって行われた自由研究発表では、国際理解、ユネスコに関する研究、シティズンシップ教育、韓国からの研究者の発表など、様々な発表があった。こうした会員の方々の発表内容を通して、私自身の国際理解教育についての視野を広げることができた。

本学会の特徴のひとつとして、小・中・高等学校における国際理解教育の実践に関する研究発表が多いことをあげることができる。総合的な学習の時間が縮減される現状の中で、国際理解教育をどのように展開したらよいのか、あるいは各教科で国際理解教育の視点を取り入れた授業の構成について、これからの実践研究に期待したい。

最後に、今年度の大会実行委員長であり平和教育に関するシンポジウムの企画をされた井ノ口貴史先生と大会に運営にかかわられた会員の方々、そして大会のお手伝いをしてくださった大会開催校の京都橘大学の学生のみなさんに深く感謝申し上げます。

立命館大学　森田　真樹

３月11日に発生した東北地方太平洋沖地震により、お亡くなりになられた皆さまに哀悼の意をささげ、心からご遺族の皆さまにお悔やみを申し上げます。また、地震や原発事故で被災された皆さまに、心からお見舞いを申し上げます。被災地の１日も早い復旧をお祈りいたします。

未曽有の大震災と大事故。国際理解教育関係者も、当然、無関心でいることはできない。津波被害ですべてが失われた街の様子、放射能測定器を持ち歩かなければならない子どもたちの姿などを見ながら、国際理解教育の研究に携わる大学教員の一人として、これまで何を学生たちに語り、これから何を語っていけばよいのか、自問自答する最中での第21回研究大会への参加となった。

10年の節目を迎える９・11以降の平和教育をめぐる公開シンポジウム、ESD研究の最新状況を知ることができた特定課題研究、また、様々な理論や実践を学ぶことができた自由研究発表など、国際理解教育学会の進展に寄与する力作が多くあった。たとえば、ジャーナリストの西谷氏を招いた公開シンポジウムでは、ジャーナリストやマスコミの産物としての報道や書物などから情報を入手せざるをえない私たちの情報収集面での限界性なども、改めて気付かされた。

自分の研究への戒めも込めて、雑駁な感想を述べるのであれば、国際理解教育研究の研究方法論の整備の必要性という点についてである。今回も、様々なタイプの研究報告があり、学ぶことの多い大会であったことは確かである。その一方で、とくに自由研究発表では、個々人のアプローチによる研究方法がとられているがゆえに、様々な研究を、同じ土俵の上で語ることが困難ではないかと感じる場面に何度か出くわした。国際理解教育の特性からして、統一された研究方法を見出すことも難しいとは思うが、多様な研究を繋ぎ、国際理解教育の研究体系を構築していくためには、国際理解教育研究ならではの研究方法論を探究する研究が増えていくことも、今後、学会としての重要な課題となるのではないかと、改めて考えさせられた研究大会でもあった。

最後に、このような第21回研究大会を運営いただきました京都橘大学の関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

感性的アプローチによる国際理解教育

目白大学　中山　博夫

今年度第１回実践研究会の報告をさせていただきます。

昨年度末より，実践研究委員会では，今後の国際理解教育の実践のあり方を求めて長時間にわたって活発な論議を繰り広げました。その議論は，国際理解教育の実践の概念を柔軟に捉え直し可能性を広げよう，そのために感性的アプローチに着目してはどうだろうかという方向に向かっていきました。そこで今年度第１回実践研究会では，「国際理解教育の可能性を広げる－感性的アプローチに着目して－」というテーマの下に，多様な実践例を集め，そこから学ぼうということになりました。

７月２日（土）に目白大学を会場として，学生も含めておよそ70人の参加者で，実践研究会をもちました。以下にテーマと発表者を紹介します。

①「笑い（漫才）と文化理解」小川陽介（江戸川区立平井西小学校）

②「民族楽器と音」居城勝彦（東京学芸大学附属世田谷小学校）

③「世界遺産とにおい」祐岡武志（奈良県立奈良法隆寺国際高校）

④「触覚メディアとしてのiPad」今田晃一（文教大学）

⑤「ことばと身体」横田和子（早稲田大学）

⑥「福祉とアート」太田好泰（エイブル・アート・ジャパン）

⑦「色・文化と教育」竹本紗野香（早稲田大学大学院生）

⑧「クロアチアのアートフェスティバル」相田南美・大津朋子（早稲田大学学生）

多田孝志委員長（目白大学）の挨拶の後，今田晃一委員

「民族楽器と音」の発表

「世界遺産とにおい」の発表

（文教大学）と山西優二委員（早稲田大学）の司会で心躍るような研究会が進んでいきました。

１番目は「笑い（漫才）と文化理解」です。小川陽介先生がオーストラリア人の元ALTのトーマスさんとコンビを組んだ，オージービーフの漫才から始まる発表は，会場を笑いの渦に巻き込みました。２番目は，居城勝彦先生です。民族楽器を見せながら登場し，「なりきりフォルクローレ」などの実践を紹介されました。それらの実践は，国立民族学博物館のアウトリーチ教材「みんぱっく」を活用したものです。３番目は，祐岡武志先生です。奈良の世界遺産である寺院には長年の祈りの習慣の中で形成されたにおいと空間があるというお話には，目からうろこの思いでした。４番目は今田晃一先生です。情報機器であるIPadをいったいどのように使うのだろうかと思っていたのですが，iPadの中に入っている教材を大きくしたり，その向きを変えたりすることによって，グループの話し合いを円滑にしていくという発表がされました。iPadが情報ツールとしての使い方に納得させられました。その他にも，横田和子先生の野口体操やことばと身体との関係についての発表，太田好泰さんの障害のあるなしを越えるアート表現実践の発表，竹本紗野香さんのシュタイナー教育と色，色と規範性についての発表が続きました。最後は，相田南美と大津朋子さんのクロアチアのアートフェスティバルの発表でした。戦火の傷跡の残るクロアチアのアートフェスティバルで，ことばを介さないアート交流をされた経験が熱く語られました。どのように整理し，どのように深めていくのかが，実践研究委員会の課題になるのだと思います。

日中韓協働教材開発プロジェクト報告

「日韓中の協働による相互理解のための国際理解教育カリキュラム・教材の開発」経過報告

北海道教育大学　大津　和子

標記科研プロジェクトは３年目を迎え，去る８月６に，韓国から５名，中国から４名の研究協力者の参加を得て，最後の全体会議を大阪でもちました。この日は，グループに分かれて９時から17時まで，開発した教材を検討したり，韓国語・中国語に翻訳したり，報告書の原稿を書いたりと，全メンバーが一心不乱に作業に打ち込みました。

「食文化」グループでは，日本チーム（藤原孝章，栗山丈弘，織田雪江，桐谷正信）が，７月10日に事前に集まりました。３カ国で開発した「食」単元にそって，「ラーメン」と「米」について３カ国で授業実践ができているが，各実践の相互評価や位置づけがまだ進んでいないという課題を確認しました。そのため，報告書のベースとなる草稿を作って８月６日に臨むことにしました。

６日は，３カ国の研究者・実践者が集まることのできる最後の機会なので，草稿をもとに，趣旨や概要の翻訳，授業実践の相互評価を行いました。中国チームからは郭雯霞，何建雯，新たに，金昴京（北海道教育大学）に通訳と授業評価に加わっていただきました。「食」グループは，共通教材の開発ではなく，共通単元（カリキュラム）の開発が特徴なので，その意味では，相互評価が重要になるからです。

「人間関係」グループは，「付き合い方」グループと「言語」グループに分かれて研究を進めてきましたが，８月６日には，二つのグループが一堂に会して協議を行いました。日本側は釜田聡，中山博夫，堀幸美，韓国からは許信恵，金多媛，中国からは赵克玲が参加しました。

「付き合い方」グループは「三国物語」を開発しました。

疲労感を越える達成感!?

これは，「祖父母の誕生日を祝う会を忘れて遊んでいた子どもの行為をどう思うか」「自分の持ち物を友人から勝手に使われたらどう思うか」など，日常の家族や友人関係に焦点をあて，３カ国の子どもたちが話し合う教材です。「言語」グループは，「韓国ホームステイ・シミュレーションゲーム」を開発しました。この教材は，日本の子どもがソウルでホームステイを行うという場面設定のシミュレーションゲームです。

「人の移動」グループは，「移民」「留学生」「旅行」の３グループに分かれて研究に取り組んできました。「移民・留学生」グループ（中山京子，服部圭子，庾喆仁，韓健洙，赵克玲，陳紅，桂英実）は，８月６日には，これまで散逸していた文書や教材を整理し直し，報告書の原稿を日本側が中心となって作成しました。

韓国の文化人類学者２人は専門的知識を反映させた翻訳作業にあたり，中国の教育学者２人は教材開発の視点から文書を作成しました。時計の針を意識しながら，顔を合わせてこそできることを中心に，それぞれの専門性が生きた作業を行うことができました。

「旅行」グループ（大津和子，東峰宏紀，田中孝治）は，日本人児童・生徒が韓国を理解するための韓国双六，中国を理解するための中国双六，韓国人・中国人児童・生徒が日本を理解するための日本双六（それぞれ韓国語，中国語）を，開発しました。８月６日には，韓国人・中国人メンバーの協力を得て主に翻訳作業を行いました。

以上のように，大変濃い一日を経て，プロジェクトの研究は大きく前進しました。そして，報告書はかなりボリュームのある教材集になることがわかりました。本研究の成果が，日韓中の相互理解を深めるために，日本でも韓国でも中国でも，大いに活用されることを願っています。

（敬称略）

博学連携教員研修ワークショップ2011 in みんぱく

恵庭市立若草小学校　東峰　宏紀

はじめに

近年、学校現場においては「小中連携」「幼小連携」「学社連携」など "連携" の語のつく施策が多く展開されている。いずれの施策においてもその第１歩として重要なのは、小中、幼小、学社等異分野間でお互いの実践の様子や考え方を知ることである。こうした意味において、"博学連携" という視点で今回、初めて本ワークショップに参加させていただき、本当に有意義な時間を過ごさせていただくことができた。なにより、私自身はお恥ずかしながら、民族学博物館を訪れること自体、初の体験だったのでなおさらである。まずは、初めて目にする "太陽の塔" に圧倒され、更に民族学博物館の充実した展示に圧倒され、参加された先生方の熱意にも圧倒される１日となった。

子どもたちに「実感」をもたらす博物館教育

ワークショップの冒頭、共立女子大学の田尻先生のご講演の中で、「知識基盤社会に対応した生きる力を育成するための博物館の役割」というご提言があった。子どもたちが体験的に学び、そこで、今求められている「思考力・判断力・表現力」等を育むために博物館だからこそできる実践についてイギリスでの博物館教育の事例から紹介されていた。ロンドンの帝国戦争博物館で平和学習を展開する生徒の話をお聞きしながら、子どもたちが目や耳で直接触れながら学ぶことの大切さを改めて考えさせられた。「実感の欠乏」といった傾向が昨今の子どもたちに見られるということが言われるようになって久しいが、こうしたことは、今も昔も、子どもたちがどれだけ「体験的」に学んでいるかということに比例しているのではないかと考える。まして、今から遠い昔のことや距離の隔たりのある場所についての学習においては、なおのこと実際に触れられる素材があるとなしでは、子どもたちの「実感」に大きな違いが生ずることは言うまでもない。

そのことは、田尻先生あとに事例を報告された一橋高等学校の海上先生の実践にもよく表れていた。子どもたちのとっては、遠い国、そしてその距離以上に隔たりを感じるであろうイスラム圏の文化について「みんぱっく」を活用

し「モノ」から感じ取る実践を展開されていた。また、「モノ」に触れる学習を出発点として、民族衣装の持つ意味、イスラム文化を取り巻く諸課題にまで学習を広げる展開は、学習をより意味あるものにしている。こうした実践例の報告も、私自身の今後の実践において大いに参考にさせていただこうと思えるものばかりであった。

民博でのタブレット型情報端末の活用

第２部ワークショップでは、①民博のデジタル・コンテンツを利用した授業作りに参加させていただいた。近年、タブレット型コンピュータが教育ツールとして注目を集めている。今回のワークショップでも民博の本館展示資料の見学や事前事後の学習においてiPadを活用する授業作りについての説明と実習が行われた。今回、最も私が注目したのは、タブレット型機器を個別に子どもたちが活用するのではなく、機器の特性を生かし、グループでの交流やまとめ、発表において機器を共有し活動するという点であった。タブレット型コンピュータは、持ち運びがしやすくその割に大画面ということで少人数のグループで画面を見せ合ったり情報を入力し合ったりということが比較的容易である。この特性を生かし、協働的に学ぶという、ＩＣＴ教育の新たな可能性を感じ取ることができた。

むすびにかえて

冒頭で述べたように、博物館のコンテンツを学校の教育活動に生かすためには、まずは私たち教職員が博物館に何があり、どのような活用法があり、博物館は、教育現場にいかなる期待をよせているのかをしっかりと知り、理解し、リソースとして蓄えることが何より重要である。今回のワークショップに参加して、民博に用意されたコンテンツを垣間見ながら、私は「これは、社会のあの単元で使えるな。」「この資料は、総合的な学習の時間のあの活動でいかせるな。」などあれこれ考えながら参加することができた。ここを、ぜひ今後、民族学博物館のコンテンツをいかした実践の始まりとしていきたいと考える。

特定課題研究プロジェクト報告

「文化的多様性と国際理解教育」研究会報告

早稲田大学非常勤講師　横田　和子

特定課題研究「文化的多様性と国際理解教育」においては，昨年９月の採択以来１年あまり，これまで，プロジェクトチーム内での議論を重ねて参りました。そもそも文化とは何か，多様性とはどういうことか，というところから議論がはじまり，この二つの単語でさえ，同じ日本語話者であっても指し示す内容に幅があることから，「文化的多様性」という概念自体がいかにあいまいで大雑把なものであるかを思い知らされ，更にはそれが「国際理解教育」とどうかかわるのか，という点も含め，問いだらけの研究スタートとなりました。

本プロジェクトの出発点には，国際理解教育において，知的な理解・論理でわかる理解も大事だけれど，それとは異なる理解のあり方を模索することを焦点化したいという思いがありました。国際理解教育において，積み重ねていく理解，意識的に努力していく理解というのも確かに大事だけれど，それとは異なる理解のあり方，直感で，感覚的にわかる，身体的にわかる，無意識的にわかる，腑に落ちる，肌でわかる，背中でわかる，というようなことは，私たちの生活においてたくさんあるわけですが，そこを国際理解教育と結び付けて模索することを焦点化したいという思いです。しかし，後者を扱うと，しばしば前者を排除した議論になりがちです。そうではなく，知性や論理と感性や直感，意識と無意識，言語と非言語などを取り結びながら理解ということ，あるいは理解できないということを考えてみたい，と思っています。

現在，研究の方向性としては，

①多様性を結び全体としてまとめうる「原理」の呈示

②文化的多様性をまとめる具体的「チャンネル」と「方法論」の呈示

③新たなアプローチの文化的多様性への応用についての実践的研究

という三つの柱を軸としていくことになっています。

研究会は，この９月に第一回の公開講演会および公開研究会を行いました。

第一回公開講演会は詩人で比較文学者の管啓次郎先生をお招きしました。文化とは何か，多様性とは何か，そして教育がそこにいかにかかわれるのか，根源的な問い直しの第一歩として，まずは「地球化」した世界における文化の多様性へのまなざしそのものを捉えなおす時間を持ちたいと思ったのが，管先生をお招きしたきっかけです。管先生の近著『野生哲学』で描かれているネイティブ・アメリカンの＜７代先のことを考えて今のことを決定する＞というあり方は，これからの私たちの暮らし，持続可能性と文化の多様性とのかかわりを考えていくうえで，多くのヒントを与えてくれます。

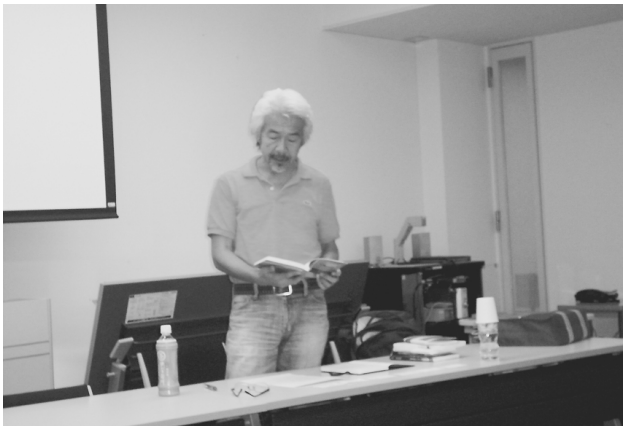
公開講演会では，理解とは実用的幻想であり，個人的な曲解や誤解にこそ意味があるという「理解」像について，先生の挑発的なお話をうかがうと同時に，管先生が谷川俊太郎など国内外の詩人とともに編まれた震災チャリティー本『ろうそくの炎がささやく言葉』（野崎歓・管啓次郎編・勁草書房）より，先生自ら自作の詩を朗読され，また地球は鉄の塊であるというお話からスタートして，クック諸島やイースター島，サモアやハワイなどの鮮やかな映像を紹介されるなどして，知性と感覚をフルに揺さぶられながら「文化的多様性」を考えるダイナミックな時間となりました。

一方，公開研究会では，＜多様性を結び全体としてまとめうる「原理」の呈示＞を目的として，河野英樹会員（目白大学）より，清水博の場の理論および市川浩の身体論を軸とした話題提供がなされました。生命科学，細胞のふるまいなどからみえてくる場の理論もまた，人間の尺度を当然のものとしがちな私たちの価値観を揺さぶるものでした。

これまでの議論を踏まえ，引き続き公開講演会・公開研究会を行って参ります。日程等につきましては，本ニュースレターのイベント欄をご参照ください。

第二回・第三回公開講演会では，ジャワ舞踊家の佐久間新さん，作曲家の野村誠さんをお招きします。佐久間さんは，障害のある方や大阪・西成のホームレスなどとの即興ダンスを，野村さんは，子どもやお年寄り，障害のある方，外国人，動物，路上の酔っ払いなどなど，さまざまな他者との即興演奏・共同作曲を，それぞれ国内外で実践されてきました。いつでも・どこでも・誰とでも・何とでも・踊ることを目指す佐久間さんのコミュニケーションとしてのダンス，既成の音楽を学ぶのではなく，その場・その人から今，立ち現れて行く音をいとおしむ野村さんの音楽は，それぞれのジャンルを超えて，創造性が持っている包容力や価値を変容させる力，生命や芸術，その場に対する大いなる信頼に気づかせてくれることでしょう。

外部講師にお願いした三人に共通するのは，文化的多様性ということを既にあたりまえの前提として，社会を変容させるべく多彩な実践をこれまでさまざまな他者と展開されてきていることです。ここには，文化的多様性と国際理解教育を考えるうえで，まさに実践的かつ身体的な豊かな意味がこめられています。更にそこから，文化が多様であればあるほど，わからないこと，謎が増える，その謎を深めることが，学ぶ喜びにつながる。そんなメッセージを読み取ることができるはずです。このことは，国際理解教育が知的にも感覚的にも，より豊かな実践をはぐくんでゆくヒントとなるはずです。会員の皆様には，上記研究会等にふるってご参加いただければ幸いです。



自作の詩を朗読する管啓次郎先生

2011（平成23）年度総会報告

第21回を迎えた研究大会が京都橘大学にて６月18－19日に盛会に開催される中，2011年度の総会が開催され，2010年度の事業報告・決算報告ならびに2011年度の事業計画・予算計画が承認された。

2010年度（平成22年度）事業報告について

１．第20回研究大会開催

日本国際理解教育学会第20回研究大会が，７月２日（金）～４日（日）聖心女子大学を会場に開催された。参加者は，講演者，30名以上の海外ゲスト，大会開催校関係者，学生ボランティアを含めて，計325名であった。

20回大会という節目の大会として，ユネスコ前事務局長の松浦晃一郎氏および東京大学教授の佐藤学氏による二つの特別（基調）講演をはじめ，本学会の到達点と展望と題した記念シンポジウム，シティズンシップ教育をテーマに掲げた特定課題研究シンポジウム，東アジアの国際理解教育等の多彩なテーマごとの自由研究発表69本が設けられた。本大会は，韓国ユネスコ国内委員会のESD教員研修としても位置づけられ，韓国の先生方もESDの分科会等に参加された。

２．各委員会・事業報告

１）研究委員会

①共通テーマ「共生社会の構築と国際理解教育」

②22年度終了プロジェクト

「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」（代表:嶺井明子）は20回大会の特定課題研究として研究成果の報告を実施し，紀要17号に特集論文として成果発表を行う。

③継続中のプロジェクト

「持続可能な社会形成と教育：ESDの実践基盤に関する総合的研究」（代表：永田佳之）は，第21回大会にて特定課題研究として研究成果を報告する。

④22年度新規プロジェクトの採択

「文化的多様性と国際理解教育」（代表：横田和子）が2010年９月からスタートした。

⑤23年度新規プロジェクトの募集

23年度にスタートする研究プロジェクトの募集を2011年１～２月に実施した。採択は，2011年６月を予定

２）紀要編集委員会

①紀要16号のリニューアル刊行

明石書店より2010年６月に刊行行された。

②紀要17号の編集・刊行　紀要「国際理解教育」17号の刊行（第21回研究大会での配布）に向けての編集作業がおこなわれ，第15号からは，学会の特定課題研究に対応した特集論文を掲載することとなり第17号では「シティズンシップと国際理解教育」として，特集論文とを掲載した。尚，今号から特定課題研究についてプロジェクトチームおよび研究委員会にて査読を行うこととなった。

③投稿規程の変更

連続投稿の禁止，タイトルだけでなくキーワードをつけること，投稿段階からタイトル，キーワードの英語表記もお願いする。また，国際理解教育の固有性をはかるために，査読評価観点に「国際理解教育との関連」を追加する。

④実践研究ノートのカテゴリーを設けることについて

実践研究論文の投稿数が少なくなっていることや研究論文としての質の確保との関連から「実践研究ノート」を設ける。

３）実践研修委員会

①島根県国際理解教育研究会との連携

・日時：2010年８月６日（金）

・会場：島根県出雲市立伊野小学校，伊野コミュニティーセンター

②奈良県奈良市世界遺産教育研究実践と連携「世界遺産学習全国サミットinなら」

・日時　2010年11月28日　・会場　奈良教育大学

４）国立民族学博物館との共同事業

博学連携教員研修ワークショップ2010 in みんぱく

「学校と博物館でつくる国際理解教育-新しい民博展示を活用する―」

・日　時：2010年８月５日　・会場　国立民族学博物館

・参加者：79名　スタッフ45名

３．韓国国際理解教育学会への参加

韓国国際理解教育学会第11回大会

・日時　2010年11月13日・会場　ソウル大学

・本学会からの参加者　10名

４．20回大会記念図書『グローバル時代の国際理解教育―理論と実践をつなぐ―』の刊行

日本国際理解教育学会編著　2010年７月４日　明石書店　Ａ５版250頁

５．異文化間教育学会との連携事業への参加

異文化間教育学会創立30周年記念事業　学会連携公開シンポジウム「多文化社会を担う人づくり」

2011年３月17日開催予定　東日本大震災のため11月に延期

６．＋ＥＳＤプロジェクト普及委員会および幹事会への参加

「＋ＥＳＤプロジェクト・キックオフシンポジウム」

・日時：2011年３月１日（火）

・会場：JICA研究所国際会議場（東京　市ヶ谷）

・主催：環境省，＋ESDプロジェクト普及委員会

７．理事会開催

（理事会）	平成22年３月27日	東京
	平成22年７月２日	東京
	平成22年12月12日	東京
（常任理事会）	平成22年９月19日	東京

８．事務局報告

１）会報発行　第37号（2010年10月）・第38号（2011年３月）

２）英文ホームページの作成・公開

３）後援名義

・グローバル教育コンクール2010（主催：外務省）

・平成22年度国際教育セミナー（主催：財団法人大阪府国際交流財団）

・夏期教員ワークショップ（主催：武蔵野市国際交流協会）

・世界遺産学習全国サミットinなら（主催：文部科学省・奈良市教育委員会・奈良教育大学・奈良国立博物館　世界遺産学習連絡協議会）

・国立民族学博物館　博学連携ワークショップ（主催：国立民族学博物館 文化資源研究センター）

４）会員数（2011年３月末）

481名（正会員名411，学生会員63名，団体会員7名）

５）会費納入状況：約70％

2010（平成22）年度 日本国際理解教育学会の収支決算　平成22年４月１日から平成23年３月31日まで

Ⅰ．収入の部

科　目	21年度決算額	22年度予算額	22年度決算額	備　考
入会金	135,000	180,000	96,000	3000×28
年会費	3,159,000	3,000,000	3,380,000	過年度500000/本年度2782000/次年度98000
助成金	1,000,000	0	0	公文国際奨学財団より
雑収入	37,582	50,000	57,692	紀要・報告書販売，利息
当期収入合計 (A)	4,331,582	3,230,000	3,533,692	
前期繰越収支差額	2,083,909	3,175,388	3,175,388	
収入合計 (B)	6,415,491	6,405,388	6,709,080	

Ⅱ．支出の部

科　目	21年度決算額	22年度予算額	22年度決算額	備　考
１．事業費	2,757,651	3,660,000	3,612,727	
大会運営補助費	400,000	400,000	400,000	22年度大会用
紀要委員会費	85,180	200,000	178,600	17号編集費
紀要刊行費	1,100,000	500,000	500,000	16号刊行費
会報刊行費	189,895	250,000	198,450	Vol. 37, 38刊行費
理事会費	192,710	400,000	380756	理事会3回・常任1回
研究委員会費	500,000	500,000	500,000	
国際理解教育実践研修会費	200,000	150,000	150,000	
国立民族学博物館との共同事業	89,866	80,000	78,503	
国際交流費	0	50,000	50,000	
学会賞	0	30,000	30,000	
20回大会記念事業		1,000,000	999,360	
20周年記念事業		100,000	147,058	事典編纂会議費・旅費
２．管理費	372,100	540,000	457,823	
事務局経費	44,430	60,000	30,620	
人件費	26,000	100,000	52,500	紀要・ニューズレター発送アルバイト
通信費	156,300	170,000	163,550	紀要・ニューズレター郵送費
設備・備品費	0	10,000	0	
消耗品費	2,573	20,000	22,166	事務用品
会議費	12,127	30,000	48,117	理事会会場使用料
旅費交通費	▲124,160	80,000	35,030	
印刷製本費	0	60,000	99,750	封筒印刷費
雑費	6,510	10,000	6,090	振込手数料
３．予備費	110,352	60,000	50,000	事典編纂事務・通信費
当期支出合計 (C)	3,240,103	4,260,000	4,120,550	
当期支出差額 (A)-(C)	1,091,479	-1,030,000	-586,858	
次期繰越収支差額 (B)-(C)	3,175,388	2,145,388	2,588,530	

2011年度（平成23年度）事業計画について

１．全体方針

①会員に資する学会運営および学会組織の改善
②21世紀の教育的課題に対応した研究・実践活動の展開
③海外の関連学会・団体，国内の関連組織との連携の強化
④学会の財政の安定化に向けて，会員の拡大および会費納入の促進
⑤会員の研究・実践活動への支援および活動機会の拡大
⑥研究の機会拡大に向けて，外部資金獲得のための積極的な活動の展開
⑦20周年記念事業の推進

２．各委員会等の事業計画

１）研究委員会
特定課題研究プロジェクトの推進
①「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育（担当理事：嶺井明子）：
学会誌『国際理解教育』Vol.17（2011年６月刊）に「特集」として研究成果を発表
②「持続可能な社会形成と教育－ESDの実践的基盤に関する総合的研究－」（担当理事：永田佳之）：2011年度研究大会特定課題研究において研究成果を発表
③「文化的多様性と国際理解教育」（代表：横田和子）公開研究会等を開催し研究を推進
④2011年度新規プロジェクトの申請
「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」（代表：藤原孝章）→採択
「国際理解教育と評価（アセスメント）」（代表：小関一也）

２）紀要編集委員会
①紀要『国際理解教育』第18号の編集と刊行
②会員からの論文投稿募集
③第18号特集テーマ「ESD（持続可能な開発のための教育／持続発展教育）」
④投稿規定　学会ウェブサイトに掲載

３）実践研究委員会
①基本方針
・３年間の見通しをもち，最終年あるいは翌年には，国際理解教育に実践の基調をなすものについて学会会員に提言・報告する機会をもつ。
・担当理事相互の論議を重視する。さまざまな機会を捉え，論議の場を確保する。
・開かれた研究・実践の場とし，公開性・透明性を重視する。
②2011年度のテーマ：「国際理解教育の可能性を広げる」－感性的アプローチに直目して－
③実践研究会を開催
日時：７月２日（土）会場：目白大学新宿キャンパス

４．20周年記念事業

『現代　国際理解教育事典(仮称)』の編纂・刊行
・各項目についての記述は，単なるキーワードの一般的解説でなく学会としての視点を示す。
・学問的な刊行物としての水準を保つためにも刊行までに概ね２年の時間をかける。
・実践者が多い学会の特色を生かし，特徴的な実践も取り上げて解説する。
・20周年図書の構成に準じた内容構成とし，カテゴリーを構成する。
・Ａ５サイズ　5000円弱　横書きとする。
・出版社：明石書店とする。

５．各事業

①国立民族学博物館との共同事業
博学連携教員研修ワークショップ2011 in みんぱく「学校と博物館でつくる国際理解教育」
会場：国立民族学博物館　日時：8月５日(金)
内容：講演　ミュージアムツアー　ワークショップ等
②日韓中の協働による相互理解のための国際理解教育カリキュラム・教材の開発」
2011年度　国内会議　会場　京都橘大学　６月17日（金）
2011年度　全体会議　会場　大阪　８月６日（土）
③国際企画・海外スタディツアーの企画準備
2012年度夏の実施に向けた企画の準備の着手

６．2012年度（平成24年度）第22回研究大会への準備

開催日時：平成24年　（詳細未定）
開催会場：埼玉大学
実行委員長：桐谷正信

2011（平成23）年度 日本国際理解教育学会の予算　平成23年４月１日から平成24年３月31日まで

Ⅰ．収入の部

科目	22年度決算額	23年度予算額	備考	22年度予算額
入会金	96,000	100,000		180,000
年会費	3,380,000	3,300,000		3,000,000
助成金	0	1,000,000	公文国際奨学財団	0
雑収入	57,692	50,000	紀要販売等	50,000
当期収入合計（A）	3,533,692	4,450,000		3,230,000
前年度繰越収支差額	3,175,388	2,597,530		3,175,388
収入合計（B）	6,709,080	7,047,530		6,405,388

Ⅱ．支出の部

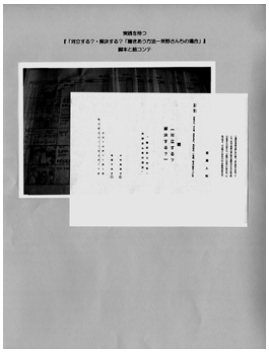
科目	22年度決算額	23年度予算額	備考	22年度予算額
1.事業費	3,603,727	3,680,000		3,660,000
大会運営補助費	400,000	400,000	24年度大会用	400,000
紀要委員会費	178,600	200,000	18号編集費	200,000
紀要刊行費	500,000	500,000	17号刊行費	500,000
会報刊行費	198,450	250,000	Vol.39,40刊行費	250,000
理事会費	380756	400,000		400,000
研究委員会費	500,000	500,000		500,000
国際理解教育実践研究会費	150,000	200,000		150,000
国立民族博物館との共同事業	78,503	80,000		80,000
国際交流費	50,000	50,000		50,000
学会賞	30,000	0		30,000
20回大会記念事業	990,360	0	記念図書刊行費・特別講演費	1,000,000
20周年記念事業	147,058	1,000,000	国際理解教育辞典編纂	100,000
国際企画事業費	0	100,000		0
2.管理費	457,823	640,000		540,000
事務局経費	30,620	60,000		60,000
人件費	52,500	100,000		100,000
名簿作成費	0	100,000	新規	0
通信費	163,550	170,000	郵送費	170,000
設備・備品費	0	10,000		10,000
消耗品費	22,166	20,000	プリンタインク、宛名ラベル等	20,000
会議費	48,117	30,000	会場借料	30,000
旅費交通費	35,030	80,000		80,000
印刷製本費	99,750	60,000	封筒印刷代	60,000
予備費	50,000	130,000		60,000
当期支出合計（C）	4,111,550	4,450,000		4,260,000
当期支出差額（A）-（C）	-577,858	0		-1,030,000
次期繰越収支差額（B）-（C）	2,597,530	2,597,530		2,145,388

会　員　だ　よ　り

手作り教材の完成に手を貸してください。国際理解教育と平和教育のコラボ！

『「対立する？・解決する？「聴きあう方法－茶野さんちの場合」』の実践協力者を募集！

清泉女子大学大学院　馬場　千枝子
清泉女子大学大学院　木村　真理子



本学の地球市民学専攻（共学・社会人クラス）の松井ケティ教授による「包括的平和教育」を学んだ有志で，紛争解決の基本的手法の一つである「私メッセージ」を使いやすく広く紹介しようと映像用脚本をつくりました。それを叩き台にして，小・中・高校など授業のなかで実際に使えるものにしたいと考え，そのための実践をしていただきながら完成に協力してくださる方を探しています。

使用方法は，朗読劇・寸劇・静止劇など各段階によって使える形で使っていただき，感想や報告をいただきながら小学校編・中学校編・高校編などの手引き作成を考えています。ご相談くだされば一緒に活用方法を考えたいと思いますし，その手引きなどの作成にもご協力いただけると，なおいい活用紹介ができると確信します。

この脚本は，親と子の対立に題材をとり，「聴きあう方法―茶野さんちの場合」としました。家族間の対立に題材をとったのは，家族自体が国際的な最少グループであるとの考えです。同じ親から生まれながらそれぞれに顔かたちが違い，考え方なども違う。それぞれの考え方でお互いを理解するから対立が生まれる。国際的な紛争は，別の家族との関係性でより複雑な要素が絡んではきますが，その沿線上にあるものとも考えられます。そして，どのような紛争解決の基礎も，武力ではなく「対話」であり，その基本は「私メッセージ」にあると私たちは考えました。

「聴きあう方法」は「私メッセージ」をさし，それは「I（アイ）メッセージ）」と言われ，国際理解・平和教育などの分野では知る人ぞ知るコミュニケーション方法ですが，経験なしには習得は難しいことがあります。まずは，その方法を知り，実践し，経験し，習得する機会が必要です。それが個の平和から家族の平和，クラスの平和，学校・地域の平和，しいては国際理解・国際平和へつながります。国際理解教育と平和教育のコラボです。ぜひ，会員の皆さまのご協力をお願いする次第です。少しでもご興味のある方はemail:ialac356g@seisen-u.ac.jpにご連絡ください。お待ちしております。

理事会（各委員会等）報告

研究委員会より

筑波大学　嶺井　明子

1．特定課題研究プロジェクトの推進状況

現在下記の三つのプロジェクトが進行しています。学会のホームページに公開講演会，公開研究会の詳細な案内が掲載されていますので，どうぞご参加ください。

①「文化的多様性と国際理解教育」（代表：横田和子）

2011年度第１回　９月24日（土）
早稲田大学文学部（戸山キャンパス）

2011年度第２回　11月26日（土）
早稲田大学文学部（戸山キャンパス）

2011年度第３回　１月14日（土）　聖心女子大学

このプロジェクトは2012年度の学会大会で研究成果を報告予定です。

②「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」（代表：藤原孝章）

2011年度第１回　11月27日（日）
関西地区：同志社女子大学今出川キャンパス

2011年度第２回　12月18日（日）
関東地区：東京学芸大学附属世田谷小学校

このプロジェクトは2013年度の学会大会で研究成果を報告予定です。

③「持続可能な社会形成と教育」（代表：永田佳之）

2011年６月の学会大会における研究成果の報告，フロアからの質疑応答をふまえ，現在は学会紀要第18号に掲載予定の原稿をとりまとめ中です。

2．新規プロジェクトの募集

2012年度スタートの新規プロジェクトを公募いたします。詳細は学会ホームページに掲載しておりますので，会員の皆様の応募をお待ちしております。（〆切は１月７日です。）

3．検討中の課題

前号（第38号）でも「検討中の課題」としてお知らせしましたが，特定課題研究の実施方法，公募方法を巡って引き続き検討しています。今後の基本構想としては，２本は公募，１本は研究委員会主導，が了承されています。研究委員の在任期間は３年ですので，３年間で新規スタートする３本のプロジェクトのうち，２本は公募，１本は研究委員会がリーダーシップをとり取り組むという構想です。ただし，大規模なプロジェクトを実施するには科研費など外部資金獲得の必要性も指摘され，次年度はとりあえず公募の方式をとることとなりました。詳細について，今後さらに検討する必要があります。

紀要編集委員会より

同志社女子大学　藤原　孝章

1．学会誌『国際理解教育』17号が刊行されました。

学会紀要が，16号に続き明石書店から発行することができました（市販もかねます）。前号に続き，明石書店編集担当の森富士夫さんには，丁寧な編集作業をしていただきました。感謝申し上げます。

2．『国際理解教育』18号の発行スケジュールは，次の通りです。

論文応募の締め切りは７月31日でした。応募総数は25件と多数でした。応募の内訳は，研究論文（一般）が15件，研究論文（特集），研究ノート（特集），実践研究（特集）が各１件，実践研究（一般）が５件，実践研究ノート（一般）が２件です。

18号特集は，ESD（持続可能な開発のための教育／持続発展教育）と国際理解教育です。一般応募の他に，本学会第21回研究大会（於京都橘大学）での特定課題研究で発表され，議論された内容が４本分余りの分量で掲載される予定です。

また，今回，実践研究は５件の応募がありましたが，18号からは実践研究論文に昇華しないまでも，実践報告に近いカテゴリーとして「実践研究ノート」を設けました。これについても２件の応募がありました。

原稿の締め切りは，ほぼ２か月後の９月22日です。その後の査読をへて，掲載論文が決定されます。最終原稿の提出期限は３月１日です。応募論文に関しては，編集委員会として，丁寧な査読をおこない，リライトの仕方などについてもアドバイスをいたします。

誌面としては，査読論文の他に，「特集論文」，諸報告，書評・新刊紹介などが掲載されます。（注：書評・新刊ともご希望の場合は編集委員会に著書を寄贈してください。委員会で判断の上，依頼させていただきます。新刊紹介については執筆者紹介としています。）

理事会報告

文化学園大学　栗山　丈弘

2011年度第１回の理事会が21回大会にあわせて６月17日（金）に京都橘大学にて開催されました。大津会長，藤原副会長をはじめ，17名の理事と事務局１名を含め18名が出席しました。

主たる議題は，翌日の総会に諮る2010年度事業報告，決算報告，2011年度の事業計画，予算案の審議でした。大津会長のもとでの新体制が発足してからの１年目を振り返り，２年目を展望する理事会となりました。2010年度は，学会設立20周年の記念事業が行われましたが，一方で，公文国際奨学財団からの助成金が得られなかったために，各委員会・事業費の削減が強いられました。そのような環境の中でも各理事，会員皆様のご協力により当初の赤字見込み学を下回る形で事業を終えることができました。2011年度予算では，幸い公文国際奨学事業財団からの補助金を得ることができ，20周年記念事業のまとめとなる『現代国際理解教育事典（仮称）』の刊行事業をすすめることが可能になりました。事業報告，決算報告，事業計画，予算案の詳細につきましては，総会報告の頁をご覧いただければと思います。

この他，昨年からすすめておりました英文ホームページにつきましても，担当理事の今田理事のご助力により，今年度より公開されたことが報告されました。（http://www.kokusairikai.com/en/）学会による海外スタディツアー等の国際企画も予算化され次年度に向けた準備がスタートします。新たな取り組みとしましては，近年，個人情報保護の観点から作成を取りやめておりました会員名簿につきまして，会員間の交流を活性化する目的で再検討することが審議されました。情報保護を踏まえた形での新たな名簿の作成，公開について検討していくことが確認されました。詳細が決まりましたら，会員の皆様へのお知らせいたしますのでご協力をお願いいたします。

お知らせ―これからの行事／イベント案内

「文化的多様性と国際理解教育」の公開講演会・公開研究会のご案内

〈第２回公開講演会・公開研究会〉

日　時	11月26日（土）　13：00－18：00
場　所	未定（都内を予定）
プログラム	公開講演会（13：00－15：00） 講師：佐久間新（ジャワ舞踊家） 内容：さまざな他者と即興のダンスを実践されてきた佐久間さんにお話をうかがい、多様性と身体・非言語を結ぶチャンネルについて考えます。 ※軽く体を動かす可能性がございます。動きやすい服装でお越し下さい。 公開研究会（16：00－18：00） 話題提供：小林亮（玉川大学）・横田和子（早稲田大学非常勤講師） 内容：文化的多様性をまとめる具体的「チャンネル」と「方法論」の呈示について検討します。

〈第３回公開講演会・公開研究会〉

日　時	2012年１月14日（土）　13：00－18：00
場　所	聖心女子大学
プログラム	公開講演会（13：00－15：00） 講師：野村誠（鍵盤ハーモニカ奏者・共同作曲実践家） 内容：その「場」やその人から今、立ち現れて行く音をいかした実践で知られる野村さんにお話を伺い、多様性を生かした協働のありかたを考えます。 公開研究会（16：00－18：00） 話題提供：南美佐江（奈良女子大学附属中等教育学校）・祐岡武志（法隆寺国際高校） 内容：新たなアプローチの文化的多様性への応用について、実践面から検討します。

（日時・場所等は変更の可能性がございます。詳細は、学会ホームページでご確認下さい）

「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」の公開研究会のご案内

〈2011年度第１回公開研究会（関西地区）〉

日　時	11月27日（日）　12：30－16：30
場　所	同志社女子大学今出川キャンパス純正館Ｓ506教室（京都市営地下鉄烏丸線今出川駅徒歩10分）
プログラム	１．松井克行（大阪府立旭高等学校）「イギリス語学研修の学びについて」（仮題） ２．橋崎頼子（神戸大学非常勤講師）「双方向の学びを目指したスタディーツアーの事例分析」（仮題） ３．織田雪江（同志社中学校・高等学校）「スタディ・ツアーの成果と課題を考える－『アジア国際夏期学校』の取り組みを事例に」 ４．藤原孝章（同志社女子大学）「タイ・スタディツアーにおける構成的学び－同志社女子大学授業科目「海外こども事情」の場合－」 ５．山中信幸（柳学園中学校・高等学校）「教師海外研修の意義とその活用」（仮題） ６．金田修治（大阪府立三島高等学校）「NGOと連携したボルネオ・スタディツアーにおける教師の学びと国際理解教育」 ７．中山京子（帝京大学）「多様な視点をどう織り込むか：グアムスタディーツアーを事例に」 ８．研究の枠組みづくり

〈2011年度第２回公開研究会（関東地区）〉

日　時	12月18日（日）　12：30－16：30
場　所	東京学芸大学附属世田谷小学校（東急東横線自由が丘駅から東急コーチバス）
プログラム	１．堀幸美（江別市立大麻東小学校）「ダンザニアスタディツアーからの教材～小学校での実践～」 ２．居城勝彦（東京学芸大学附属世田谷小学校）「パールハーバーワークショップでの学びを生かした中学校音楽科の活動」 ３．藤原孝章（同志社女子大学）「タイ・スタディツアーにおける構成的学び－同志社女子大学授業科目「海外こども事情」の場合－」 ４．中山京子（帝京大学）「多様な視点をどう織り込むか：グアムスタディーツアーを事例に」 ５．大滝修（松陽高校）「カンボジア・スタディツアーと協同ゼミナールについて」 ６．栗山丈弘（文化学園大学）「国際観光動向における海外スタディツアーの意義について」 ７．研究の枠組みづくり

（日時・場所等は変更の可能性がございます。詳細は、学会ホームページでご確認下さい）

2012年度　第22回研究大会のお知らせ

- 開催日時：2012年　詳細未定
- 開催会場：埼玉大学
- 実行委員長：桐谷正信（埼玉大学）

事　務　局　通　信

新　入　会　員

以下の33名が平成23年10月２日までに承認されました。

氏　名	所　　属	氏　名	所　　属
藤田　昭男	福岡県立筑紫中央高等学校	村越　俊	早稲田大学大学院
坂出　義子		内山　知一	筑波大学大学院
南部　和彦	東京都目黒区立原町小学校	荒木　寿友	立命館大学
池田　恭子	立教大学大学院	三浦　綾季子	一橋大学大学院
山本　俊正	関西学院大学	小西　尚実	関西学院大学
阿部　和彦	仙台白百合学園中学高等学校	金　玹辰	北海道教育大学旭川校
濱島　功	神奈川県湯河原町立吉浜小学校	柾本　伸悦	広島経済大学
菊地　恵美子	早稲田大学大学院	竹本　景生	奈良教育大学附属中学校
芳賀　拓也	上越教育大学大学院	西岡　尚也	琉球大学
小野寺　志津	筑波学院大学	空閑　知子	京都女子中学・高等学校
佐藤　雄介	早稲田大学大学院	清水　和久	金沢星陵大学
茂木　淳子	上越市立大手町小学校	大山　万容	京都大学大学院
山内　麻祐子	兵庫教育大学大学院	川口　広美	日本学術振興会
横嶋　敬行	鳴門教育大学大学院	潘　英峰	大阪大学大学院
山方　元	愛知県立豊橋工業高校	岡田　憲次郎	福岡市立友泉小学校
小林　佑里恵	上越教育大学大学院	松尾　知明	国立教育政策研究所
竹本　紗野香	早稲田大学大学院		

寄　贈　図　書

●馬渕　仁 編著『多文化共生は可能か？』勁草書房，2011
●『絵で見るマレーシアの発展　日馬交流20年間の児童生徒の絵画作品を通じて』認定特定非営利活動法人メイあさかセンター，2008
●世界につながる子どもの本棚プロジェクト編『多文化に出会うブックガイド』読書工房，2011

事務局からの連絡とお願い

◆年会費納入のお願い
当学会の活動は会員の皆様の会費でまかなわれております。今年度までの年会費未納の会員は至急会費をお支払いくださいますよう宜しくお願いいたします。
●会　費：正会員 8,000円　学生会員 4,000円　団体会員 30,000円
●郵便振り込み：口座番号　00120－5－601555　加入者名 日本国際理解教育学会

◆紀要『国際理解教育』の購入手続きについて
現在，第１号を除き，最新の17号までの在庫がございますが，在庫が僅少の号も出始めております。学会ホームページにバックナンバーの総目次が掲載されています。
ご希望の号数および冊数をファックス（042－327－8874）またはＥメール（kokusairikai@bunka.ac.jp）で事務局までお知らせください。振り込み用紙をお送りいたします。会員の皆様には，会員価格でお求めいただけます。

◆住所・所属等変更連絡のご協力をお願いします
事務局からの郵送物が「転居先不明」で返送され，また，会員のみなさまへのご連絡が滞ってしまっている場合が少なからずあります。所属変更によるお引っ越しなどで住所・所属等に変更がありましたら，ファックス（042－327－8874）または，Ｅメール（kokusairikai@bunka.ac.jp）でお知らせください。また，会員種別の変更もお知らせください。